

法華経は玉 他経は石

布教部長 村松潮隆

絵 藤田由也

しか
而るに法華経は元よりめでたき御経なれば、誰か信ぜざると語には云ふて、而も昼夜、
朝暮に弥陀念仏を申す人は、薬はめでたしとほめて朝夕毒を服する者の如し。或は念仏
も法華経も一つなりと云はん人は、石も玉も、上臈も下臈も、毒も薬も一つなりと云は
ん者の如し。其の上法華経を怨み、嫉み、悪み、毀り、軽しめ、賤しむやからのみ多し。
経に云く「一切世間に怨多くして信じ難く」又云く「如来の現在すら猶怨嫉多し況ん
や滅度の後をや」の経文すこしもたがわず当れり。されば伝教大師の釈に云く「代を語
れば則ち像の終り、末の初め、地を尋ねれば唐の東、羯の西、人を原れば則ち五濁の生、
闘諍の時なり。経に云く『猶怨嫉多し況んや滅度の後をや』此言良に以あるなり」と
と。此等の文釈をもつて知るべし。日本国に法華経より外の真言、禪、律宗、念仏宗等
の経教、山山、寺寺、朝野、遠近に弘まるといへども、正しく国に相應して仏の御本意
に相叶ひ、生死を離るべき法にはあらざるなり。

【語句の意味】

而るにしか 〓 それなのに。そうであるのに。

めでたき御経おんぎよ 〓 素晴らしいお経。立派なお経。

誰か信ぜざるだれしん 〓 誰も信じないはずがない。信じな

い人はいない。皆、信じている。

昼夜ちゆうや 朝暮ちようぼ 〓 昼も夜も、朝も夕も。一日中。

弥陀念仏みだねんぶつ を申すもちう 〓 「南無阿弥陀仏」と唱えている。

葉はめでたし 〓 葉は素晴らしい。良く効く葉。

石も玉も、上臈じやうろうも下臈げろうも 〓 石も寶石も、長年修行

を積んだ高僧も新米僧侶も。臈は修行年。

怨みあだ、嫉みねた、悪みにく、毀りそし、軽しめかろ、賤しむいや 〓 怨む、

嫉むねた、憎むにく、誘そしる、見下げる、卑しめる。

やから 〓 なかま。一党。

「一切世間せけんに怨あだ多くして信じ難がたく」 〓 妙法蓮華経

安樂行品第十四の一節。「一切世間が反対の

立場だから信じられない」。

「如来げんざいの現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ多し況いはんや滅度めつどの後のちを

や」 〓 法師品第十の一節。「お釈迦様、存命

中ですら、憎み妬ねたむ（怨嫉）者が多かった、
まして亡き後はなおさらである」。

されば 〓 それゆえ。

伝教大師でんぎょうだいしの釈しやく 〓 伝教大師最澄（七六七〜八二二）

の著「法華秀句」での解釈。

代を語れば 〓 時代で言うならば。

像ぞうの終り 〓 像法時代の終わり頃。お釈迦様が亡く

なつて初めの千年が正法時代、次の千年が

像法時代。

末まつの初め 〓 末法時代の初め頃。お釈迦様が亡くなつ

て二千年から一万年間が末法時代。

地ちを尋たずねれば 〓 地理的に見れば。

唐とうの東ひがし、羯かつの西 〓 中国の東、羯（日本から太平洋を

越えた所に異民族「羯」の国が在ると思われている

たようです）の西。地球上の日本の位置。

人を原たづぬれば 〓 人々を觀察すれば。人々の心を明か

せば。

五濁ごじよくの生しやう 〓 劫濁・衆生濁・煩惱濁・見濁・命濁



に穢^{けが}れた生き物。(五濁は、十月

号【法華初(心成仏鈔)】②を参照)

鬪諍^{とうじょう}の時^{とき} || 鬪諍堅固^{とうじょうけんこ}の時代。末法時

代の始めの五百年。自説が正し

いとする仏教教義が盛んに論争

される時代。

良^{まこと}に以^{ゆえ}あるなり || 実に理由があるの

だ。

文^{もん} 釈^{しやく} || 經文と解釈。

經教^{きやうきやう}、山^{やま}、寺^{てら} || 經典と教え、山

という山、寺という寺。

朝野^{ちやうや}、遠近^{おんこん} || 朝廷と民間・都会と田

舎、遠隔地も近隣も。

国に相応^{そうおう}して || 国につりあつて。国に

ふさわしい。

仏の御本意^{ごほんい} || お釈迦様の本来の氣持。

相叶^{あひかな}ひ || 互いに叶う。一緒に叶う。

生死^{しやうじ}を離^{はな}るべき法^{ほう} || 生死流転を離れる

べき教え。成仏できる教え。

あらゆるなり無いのです。

【現代語にしてみる】

それなのに「法華経は、言うまでもなく素晴らし
いお経だから、誰も信じないはずがない」と言い
ながら、それでも昼も夜も、朝も夕も「南無阿弥
陀仏」と唱える人は「この薬は良く効く」と褒め
ながら朝夕に毒薬を呑んでいるようなものです。

或いは「念仏も法華経も、お釈迦様が説かれたお
経だから同じだよ」と言う人は、石も宝石も、修
行を積んだ高僧も駆け出しの僧侶も、毒も薬も、
同じだと主張する人です。そればかりでなく法華
経信徒を怨み、嫉み、憎み、誇り、見下げ、卑し
める一党が多いのです。

妙法蓮華経 安樂行品 第十四には「世の中の多数
の人が反対意見だから、信じられない」とあり、
又妙法蓮華経 法師品 第十には「お釈迦様在世で
すら、憎み妬む者が多かった。亡き後は、なおさ

らである」と書かれており当世は、この経文の通
りに符合しています。その日本の当世を伝教大師
は『法華秀句』に予言して「時代で言うならば、
像法時代の終わりから末法時代の初め頃、地理的
に見るならば唐の国の東、羯の国の西、人々の心
を明かせば五濁に穢れた人達、自説のみ正しいと
する仏教教義が盛んに論争される時代となる。法
師品第十に『在世ですら、憎み妬む者が多かった。
亡き後はなおさらである』とある。この言葉は実
に故があり意味深い」と述べられています。これ
らの経文と解釈によって理解すべきことは、日本
に法華経以外の真言宗・禅宗・律宗・念仏宗など
のお経と教えが、山奥まで、ほとんどの寺で、都
会も田舎も、遠隔地も近隣も、全国に広まってい
るけれども、本当に日本国に相応しく、お釈迦様
の真意に叶った、成仏のできる教えではないので
す。

— 続く —